

4 分間のピアニスト

2007(平成19)年9月5日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★★★



監督＝クリス・クラウス／音楽＝アネット・フォックス／出演＝ハンナー・ヘルツシュプルング／モニカ・ブライプトロイ／スヴェン・ピッピヒ／リッキー・ミュラー／ステファン・クルト／ヴァディム・グロウナ／ヤスミン・タバタバイ／ペーター・ダフォア（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年ドイツ映画／115分）

……音楽映画の傑作がまたひとつ誕生した！ とりわけ、手錠をつけたままの演奏シーンとラスト4分間のクライマックスシーンは圧巻！ それにしても、殺人犯の天才ピアニストという構想はお見事だが、その飢えた魂とトコトンぶつかりあう、老ピアノ教師の信念もすごいもの。サスペンス性も含め、満足度100%の傑作を是非あなたの目で……。

第4章

現実から目をそむけるな！

ここにまたひとつ、すごいドイツ映画が誕生！

私が最近観たフランス映画は、『あるいは裏切りという名の犬』（04年）（1月8日鑑賞）、『サン・ジャックへの道』（05年）（2月26日鑑賞）、『情痴 アヴァンチュール』（05年）（4月28日鑑賞）、『不完全なふたり』（05年）（7月11日鑑賞）などだが、概してフランス映画は小難しい作品が多い。これに対して、ドイツ映画は主義主張がハッキリしているうえ、わかりやすい問題提起作や傑作が多い。一昨年は『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）が断トツだったし、昨年は『善き人のためのソナタ』（06年）（2006年12月13日鑑賞）が断トツ。そして最近観たものでは、『みえない雲』（06年）（2月26日鑑賞）や『ドレスデン、運命の日』（06年）（4月3日鑑賞）などのすばらしいドイツ映画が……。

クリス・クラウス監督がその構想に8年間も費やし、また1200人のオーディションを経て、何ともユニークなこの映画のヒロインにふさわしい無名の女優を見出して完成させたのがこの『4分間のピアニスト』。

2007年ドイツアカデミー賞での作品賞、主演女優賞をはじめとする数々の賞を受

賞したこの『4分間のピアニスト』は、「ドイツがそして世界が絶賛！」「2つの魂の美しき共鳴から生まれた衝撃の感動作」と評価されているが、それが決して誉めすぎではないことは、この映画を観たあなたにはきっと実感できるはず。

こういうすばらしい映画が単館でしか上映されないのは実に残念だが、ここにまたひとつ、すごいドイツ映画が誕生したことはたしか！

ショッキングな演奏シーン その1

音楽映画の傑作はたくさんあるが、この映画が際立っているのは、囚人であって天才ピアニストというヒロインのジェニー・フォン・レーベン（ハンナー・ヘルツシュェプルング）の存在自体がショッキングなうえ、そのピアノ演奏についても、1度観たら絶対忘れられないというショッキングなシーンが多いこと。

その第1は、刑務所にピアノ教師としてやってきた女性トラウデ・クリューガー（モニカ・ブライプトロイ）がピアノを弾くのに合わせて、1人ジェニーが机の上をピアノの鍵盤に見立てて両手で弾いているシーン。まず、グランドピアノの大屋根に映るそんなジェニーの動作を見ただけで、ジェニーが天才ピアニストだと直感したクリューガーもすごい。しかしそれ以上に、それまで無名女優だったというハンナー・ヘルツシュェプルングが、久しぶりにモーツァルトのピアノソナタ（あの第3楽章にトルコ行進曲のメロディがつくピアノソナタ第11番の有名な第1楽章で、変奏曲の形式によってくり返し美しい主題が展開されていくもの）を聴く中で心の底からその音楽に浸りきり、自然に指と身体が動いていくという見事な演技をしているのが印象的、というよりショッキング。

ショッキングな演奏シーン その2

ショッキングな演奏シーンの第2は、映画音楽史上初の、両手を身体の手錠に繋がれたままのピアノ演奏。ジェニーが今なぜ刑務所に入っているのか、またジェニーがなぜ殺人を犯したのか、それはストーリー展開の中で少しずつ語られていくのでそれを観てもらいたいが、ジェニーの凶暴さをよく知っているミュッツェ看守（スヴェン・ピッツピヒ）は、規則を厳格に運用していたから、たとえピアノ練習の時間であっても手錠を外すことは厳禁。もっとも、普段のジェニーであれば無理に演奏することはなかったかもしれないが、この日は養父のフォン・レーベン（ヴァディム・

グロウナ)の紹介によってヴァーリッヒ記者(ペーター・ダフォア)が取材で刑務所を訪問していたこともあって、ジェニーは多少意地になっていたよう……。その結果、ジェニーは何と、両手を身体の手前で手錠に繋がれたまま、何とも迫力あるピアノ演奏を……。こんなシーンを観るのは、まさに生まれてはじめて！

ショッキングな演奏シーン その3

この映画を絶賛する言葉の1つが、「ドイツ映画史上、最も衝撃的で、感動的なラストシーン！」、また「すべてを吹き飛ばす4分間。映画全体がまさにピアノフォルテ！」というもの。私は事前にこんな文章を読んでいたので、最後の4分間のクライマックスに大いに期待していたが、現実を観たそれは、私の期待や想像をはるかに超えた、まさにショッキングな演奏シーンだった。

コンクールの決勝戦でジェニーが演奏したのはシューマンのピアノ協奏曲だが、オーケストラがついていなければピアノ協奏曲にならないのは言うまでもないこと。シューマンが書いた唯一のピアノ協奏曲の第1楽章はわりとカッコいいもので、私もLPレコードがすり減るくらい聴いていたもの。したがって、私は勝手にその協奏曲をピアノソナタ風にアレンジして弾くものとばかり思っていたのだが、現実にはスクリーン上に広がる演奏風景は、それとは大違い！

最近では、日本でも綾戸智絵やレ・フレールのようなユニークなピアニストが登場しているが、さすがに殺人犯の囚人というピアニストはいないはず……。しかし、無名の女優であったハンナー・ヘルツシュブルングが、4分間だけ本物のピアニストとなって弾くシューマンのピアノ協奏曲は、アッと驚くショッキングなもの。

クリューガーを見て、思わず『アマデウス』を思い出したが……

1984年にアカデミー賞作品賞、監督賞など8部門を受賞した大傑作が『アマデウス』。これは、音楽映画としても最高傑作なら、モーツァルトの才能に嫉妬するサリエリの回想の中に見るスリルとサスペンスに富んだ展開においても傑作だった。私は『4分間のピアニスト』に登場する老ピアノ教師クリューガーが、ジェニーの才能を瞬時に発見したうえ、その才能を自ら伸ばしていくことがジェニーの義務であり、人生を生きていくことの意味だと考える、いかにもドイツ人らしい価値観を観ながら、思わずこの『アマデウス』のサリエリを思い出したが、それって少しヘン……？

『ヒトラー、最後の12日間』(二〇〇四年)などに続くドイツ映画の名作が登場した。最大の見どころは、「ブラボー！」と呼ばずにはいられないラスト四分間のピアノ演奏。その曲はシューマンのピアノ協奏曲第一番のアレンジだが、これまでのどのLPやCDとも異質の、驚くべきスタイル。

「才能」について、このように律儀に考えるクリューガーはいかにもドイツ人的だが、クラシック音楽以外のジェニーが好きな音楽をすべて「低俗な音楽」だと切り捨てるクリューガーの頑固さや、1度才能をモノにしてやりたいと思えば、トコトンそれをやり切ろうとするのも同じようにドイツ人氣質……？

この映画の構想に8年間も費やしたのがなるほどと思えるのは、現実にはありえないほどのコントラストのすばらしさ。すなわち、殺人犯として刑務所に収容されている囚人が、いくらピアノが上手で才能があっても、コンクールに出場するについてはさまざまな制約があるのは当然。しかも、この映画に見るジェニーの場合は、準決勝まではほぼ順調に難関を乗り越えてきたものの、決勝に臨むにあたっては、ピアノ好きな看守のミュッツェの嫉妬心にもとづく画策などもあり、誰もが出場は不可能と思えるような状況になっていたはず。したがって、それを乗り越えて出場するには、明白

息をのむラスト4分間！

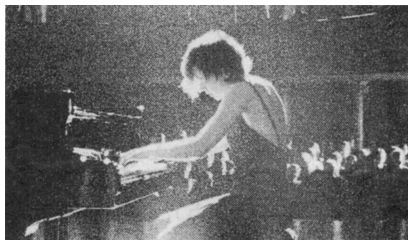
教師と生徒との間に生まれた信頼と裏切りに実証されることに。演奏を。あなたが歴史になりましたければ、何をめと所長をおだて、ジェニーの才能を見事

弁護士 坂和章平



4分間のピアニスト

あすからテアトル梅田ほか



©2006 KORDES & KORDES FILM GMBH / SWR/BR/ARTE

！。他方、少女時代から神童と呼ばれながら愛を知らずに育ち、今は殺人罪で刑務所に収容されているヒロインがジェニー。囚人の慰勞のためにピアノを弾く先生の目に映ったのは演奏に合わせた机上の架空のけん盤に両手の指を走らせているジェニーの姿。一目で彼女の才能を見抜いた先生は、刑務所の名譽のために実証されることに。演奏を。あなたが歴史になりましたければ、何をめと所長をおだて、ジェニーの才能を見事

大阪日日新聞2007(平成19)年11月16日

な違法行為すなわち脱獄しか道はないはず……。

しかし、この映画はサスペンス映画でもなければ、アクション映画でもなく、あくまで音楽映画のはず。ところが、スクリーン上では……？

ジェニーの特異なキャラは……？

日本映画最高の傑作と私が評価している『砂の器』（74年）は、天才ピアニストと絶賛された主人公が、ある日否応なく隠された過去と向き合わなければならなくなった時に発生した犯罪を、人間の「業」として描いたものだった。

これに対して、『4分間のピアニスト』は、類まれな才能を持ち、幼い頃から数々の国際コンテストに出場して「神童」の名をほしいままにしてきた主人公ジェニーが、今殺人犯として刑務所の中に入っているところからスタートする。この囚人は感情の起伏が激しく、1度怒り始めると凶暴な狼のようになってしまう、いわば女囚「さそり」のような素質を併せ持った特異なキャラ……。

なぜ彼女がそのような性格になったのかについては、彼女を「モーツァルト」にするために引き取った養父レーベンが存在と役割が大きいう。子供は子供なりに養父の期待に応えるべく努力していたのだが、ある日を境としてジェニーは断固レーベンが描く路線を拒否。すると、レーベンは何とジェニーをレイプしてまで……。そんなジェニーが、刑務所内の看守にとっても、また他の女囚たちにとってもかなりヤバイ存在となったのは当然……？

クリューガーの特異なキャラは……？

これに対してクリューガーは、少なくとも映画の前半は、ピアノや音楽を純粹に愛する立派なピアノ教師というイメージだが、実はそれは彼女の半面だけ……。世界的なピアニストに師事し、輝かしい未来を約束されていた彼女の隠された過去は、映画の後半に入って少しずつ語られていくが、実はそれもかなりの見モノ……。

日本では、絶対的天皇制下での共産主義者は、「治安維持法」によって激しい弾圧にさらされたが、マルクスを生んだ国ドイツにあっても、ナチスヒトラーの下において、共産主義者はユダヤ人と同様厳しく弾圧されたことはよく知られている。そんな中、実はクリューガーは……？ 今の彼女の特異なキャラは、そんな中で形成されてきたのかと納得……。



©2006 KORDES & KORDES FILM GMBH/SWR/BR/ARTE

そんな特異なキャラをもち、同時に不屈の闘志をもったクリューガーだからこそ、ジェニーのような特異なキャラをもった天才ピアニストと対等に向かい合うことができたことは明らか……。

サスペンスタッチも一級品

少年天才バイオリニストを主人公とした中国映画『北京ヴァイオリン』（02年）は、中国映画最高の音楽映画だったが、そこにはラストのクライマックスにおいて彼の出生の秘密が解き明かされるというサスペンス性も……。

これに対して、『4分間のピアニスト』では、殺人犯として服役しているジェニーが決勝大会を前にして、看守のミュッツェが仕組んだ策謀にはめられてしまったため、ニッチもサッチもいかに……。さらに、わが刑務所から天才ピアニストが出現すれば所長の名誉も上がると考えて、ジェニーのピアノコンテストの出場にゴーサインを出したメイヤービヤー刑務所長（ステファン・クルト）も、ジェニーが決勝大

会への出場の道を断たれた今、クリューガーは無用な存在となってしまったから、そのクビを切ったのは当然……。

このように、ドイツのオペラ座で開催される晴れの決勝大会へのジェニーの出場は到底不可能と思われたが、そんな中、想像もつかないサスペンスタッチの展開が……。

さすが構想に8年も要したクリス・クラウス監督の脚本の緻密さは立派なもの。まさにこの映画は、サスペンスタッチも一級品！

『4分間のピアニスト』というタイトルを噛みしめよう

この映画の原題は『4 minutes』。すなわち4分間という意味。したがって、邦題の『4分間のピアニスト』はあえて「ピアニスト」という単語を付加したもののだが、これはまさに日本的に絶妙なタイトル。なぜなら「4分間」だけでは一体何の映画かわからないから。もちろん『4分間のピアニスト』でもそれは同じだが、映画鑑賞後の納得度は圧倒的に『4分間のピアニスト』の方が上……？

明らかな違法行為をあえて断行し、さまざまなプレッシャーと闘ったうえで、ピアニストとしての自分に与えられた「4分間」を、黒のスリップドレスに身を包んで「自分の音楽」を貫徹したジェニーの姿は実に感動的。

プレスシートには「ドイツ映画史上、最も衝撃的で、感動的なラストシーン！」と書いてあるが、このすばらしいラストの4分間はドイツ映画史上に限らず、全世界の映画史上に残る歴史的なラストシーンの名作と評価されるはず。

私の、音楽映画としての、またドイツ映画としての、さらにサスペンス映画としての、絶対のお薦め作品がコレ。

『4分間のピアニスト』というタイトルの意味をしっかりと噛みしめながら、その感動をあなたと共有したいものだ。

2007(平成19)年9月6日記